

博士学位申請論文審査報告要旨

平成26(2014)年6月11日

学位申請者 譚 仁岸 (LD101010)

論文題目 思想空間としての「八〇年代」—「新啓蒙」思潮の諸相と現代中国

論文審査委員

坂 井 洋 史

鈴 木 将 久

尾 崎 文 昭

(東京大学名誉教授／東洋文庫)

1. 論文の内容と構成

「1980年代」は、21世紀に入ってから中国言論・文化界の関心を集め、歴史化が開始されたテーマであり、今日では当時の歴史状況を客観的に再現するための条件も次第に整いつつある。ポスト文化大革命、即ち1980年代に知的形成を行った世代の知識人が、今日の中国の言論・文化・思想・学術研究等の諸分野において、大きな影響力を持ち、指導・牽引的な役割を演じているが、著者を含む後続の世代の知識人は、彼らが構築した知の枠組／制度の中で成長してきたといえる。しかし「1980年代」は一方で、各種のイデオロギー、政治的立場からの要請に従って常に恣意的に解釈／叙述され、特定のイメージを賦与されてきた概念でもあり、その内包はいまだに流動的である。本論文は、「1980年代」の歴史状況の客観的な再現と、その内包を流動化させる機軸の対象化という、二方面に及ぶ再審作業を試みたものである。その際に検討の対象を、言論・文化界における諸議論に絞り、更に当時の議論の焦点を、「新啓蒙」というキーワードによって代表させ、関連する言説を多様なコンテキストに即して検討しつつ、同時に、それらの言説が後にどのように評価され、「1980年代」イメージに編入されていったかを分析する。この作業は、何より著者自らのアイデンティティ認識／確認という動機に出るものであり、今後の研究活動を通じて、中国の文化・社会にコミットしていく際の根拠の探索というモチーフをも持つものである。

本論文は A4 版、本文 137 頁(約 15 万字)、論文末尾に主要参考文献表 7 頁、関連事項年表 7 頁からなり、以下の各章各節から構成されている。

凡例

目次

序章

第一章 思想解放運動の光と影——「真理標準」討論と人道主義・疎外問題論争を中心に

はじめに

一 「兩個凡是」から「四項基本原則」へ

二 人間の顔をしたマルクス主義: 人道主義と疎外問題

三 批判原理としてのマルクス主義疎外論

四 「新啓蒙」知識人と「国家

おわりに

第二章 精神史としての「閲読史」——八〇年代の叢書出版を中心に

はじめに

- 一 人民には読書の自由があるのか
- 二 知の生産に携わる五つのグループ
- 三 その他の叢書と八〇年代の読書事情

おわりに

第三章 八〇年代における「文化」の意味——文化討論と「尋根」文学思潮の文脈から

はじめに

- 一 文化討論の展開
- 二 文化討論の課題及び伝統文化に関する諸説
- 三 文化討論と「尋根」文学思潮との接点
- 四 「伝統文化」に依拠する両面作戦

おわりに

第四章 伝統文化と近代化の葛藤——八〇年代の儒学言説を中心に

はじめに

- 一 現代新儒家の浮上
- 二 儒学の創造的転化と第三期発展
- 三 如何に「創造的に転化させる」か
- 四 李沢厚の「転換的な創造」説
- 五 甘陽の「文化的儒学」説

第五章 「新啓蒙」思潮の功罪——九〇年代以降の近代性批判との関連から

はじめに

- 一 普遍的価値としての近代化
- 二 近代化擁護から近代性批判へ
- 三 八〇年代以来の反近代性言説
- 四 汪暉による近代性批判
- 五 汪暉の「新啓蒙」思潮批判への疑念
- 六 封建主義批判と近代性批判

おわりに

終章 未完の「新啓蒙」思潮の貧困

主要参考文献

現代中国年表(1976~1989)

2. 本論文の概要

以下で各章毎の内容を要約する形で、本論文の概要を示す。

第一章では、体制内理論家たちが既成の主流イデオロギーに対し異見を提示した、80年代初期の対抗的言説を検討する。その焦点は人道主義・疎外概念を巡る論争だった。本章では、胡喬木のマルクス主義疎外超克論と王若水の疎外遍在論との相克についての分析を通じて、論争の内的論理を確認している。当時の体制内理論家たちが如何に主流イデオロギー空間に異質性を取り入れ、外部の学界との相互浸透作用を通して公共的思想空間の形成に貢献したか、或いはその可能性を開示したかを検証している。

第二章では80年代の出版・読書に関する状況に焦点を当てる。出版史・閲読史という観点を導入し、「新啓蒙」思潮の生起、とりわけ「文化」討論の活発化に貢献した知識人の翻訳・出版活動に着目して考察している。従来、この状況に関しては、新時期文学作品の生成や受容といった視角からの検討が比較的多くなされてきたが、ここでは社会的な拮がりを持った集団意識としてのエピステーメを的確に理解するために、むしろ社会科学や歴史方面の書籍の翻訳、紹介、受容といった面に重きを置きながら考察する。具体的には、80年代中期から、思想資源の組織的提供というのみならず、研究者、思想家、或いは社会活動家を糾合したグ

ループとして大きな影響力を發揮した五つの知識人グループ——「中国文化書院」編集委員会、「走向未来」叢書編集委員会、「文化：中国与世界」叢書編集委員会、「新啓蒙」派、「二十世紀」文庫編集委員会の仕事を整理分類し、彼らの編集した叢書の代表的なものの確認、検討を通じて、80年代の知的空間の構築過程とその内実を明らかにする。

第三章では、80年代中期の「文化熱(文化ブーム)」と呼ばれる討論について考察する。討論の展開過程、論題の編成、及び伝統文化に関する諸説——「儒学復興」説、「徹底再建」説、「西体中用」説、「精華／糟粕」説——を取り上げて分析し、特に反伝統派と目された「徹底再建」説の代表的人物の主張を検討する。更に、主流の政治／階級言説に対する対抗言説としての「文化」言説と、同時期の「尋根」(ルーツ探索)文学という文学潮流との、思想的な呼応の如何を考察する。両者における「文化」の含意の異同に焦点を当て、80年代知識人に共通した「文化」意識と、そこに込められた価値志向を多角的に浮き彫りにする。

第四章は、儒教・儒学が21世紀に入った中国において、近代的憲政主義とともに議論されるようになった状況を検証し、80年代「文化」討論における儒学に関する言説と如何なる思想的な関連を持っているのか、そして、伝統文化の代表格と見なされた儒学が如何なる方式で近代化問題と立ち向かおうとしたのかを検証する。主として「新儒家」の代表と目される杜維明の反伝統主義批判、余英時と林毓生の儒学と近代の融合を図る「創造的転化」論、李沢厚の近代化志向の「西体中用」説に基づく「転換的創造」説、甘陽の近代性批判による文化的保守主義としての儒学論を取り上げ、検討する。

第五章では主として90年代以降の80年代評価の再検討という角度から、今日的な問題群(貧富格差や官僚腐敗をはじめとする金融危機、環境汚染、社会の動乱、失業者の激増、共同体の瓦解、個人の均一化、人文精神の凋落、拝金主義の蔓延、道徳観の退廃、道具的理性の膨張などの政治的・経済的・社会的・文化的な問題や矛盾)と80年代「新啓蒙」思潮との、思想的な関連性、脈絡を検討する。特に90年代末に発表され、「新啓蒙」思潮／80年代言論・思想の批判的総括として影響力のあった汪暉「当代中国的思想状况和現代性問題」の提示した論点に批判を加えながら、80年代以来の近代化論から近代性批判への変遷、「封建主義」批判と近代性批判の異同を考察する。

終章はこれまでの五つの章／主題における検討の結果をまとめ、80年代「新啓蒙」思潮の功績、可能性と限界や問題点を指摘して、結論とする。

3. 本論文の成果と問題点

本論文は、広汎な資料収集及び明晰な資料分析を基礎に、鋭い問題設定と共に1980年代中国思想・文化状況を多角的に把握しようと試みた野心作であり、力作、労作であることは疑いない。日本では、「80年代」の思想・思潮について、個別現象については幾らかの研究があるが、それもそれ程深まっていはいないし、さらに「80年代思潮」としての総合的分析については殆ど手を着けられていないという状況にある。いまだ二三十年前のことであるから、多量の資料の中から時代を特徴づける資料をどのように特定するかについても安定した共通見解が得られているわけではない。従って、作業と仮説自体が先駆的、即ち実験的なものにならざるを得ない。中国大陸ではこの間、この課題について先駆的、実験的な著述が数点現れているが、必ずしも多くの人(当時の関係者の多く)を納得させたものにはなっていない。その意味で、著者がこの課題に挑んで新たな一歩を踏み出そうとしている、そして部分的にはそれに成功しているという点は積極的に評価されるものである。

1980年代は、文化大革命の影響から脱出し、次の時代へと移行する中国の歴史上の転回点であり、その転回を十全に捉えるためには、一つの領域に限定せず、多角的な視野を持つことが必要である。本論文は、マルクス主義思想、文化芸術、西洋思想の流入などを多層的に見ることで、80年代中国の精神史を浮かび上がらせることに成功しているだろう。

具体的にいえば、第三章の出版の動向による思潮分析は着目点として優れているし、よく調査と整理がなされている。また第二章と第四章の「思想解放」運動と「儒学」復興あるいは文化保守主義に関する部分も、資料をよく整理して明晰で説得的な分析をなし得ている。特に第四章で、80年代中国を西洋化一辺倒と捉える時に忘れがちな、伝統思想への眼差しを正面から論じたことは独創的で、特筆すべき長所である。西洋文化の受容と、伝統文化の「創造的転化」が、共に論じられたことで、80年代思想像のより立体的な把握が可能になったといえよう。これらは本論文の主たる学術的貢献と考えられる。

ポスト文化大革命時期、即ちそれまでの政治的な強圧状態から脱した後の思想・文化状況にあって、「疎外」「文化」「反封建」といった概念は、本来の概念を大幅に拡大したコンテクションをまとめて対抗言説化していたのだが、それらを統合する概念／キーワードとして「新啓蒙」を取り出したのは、80年代を鳥瞰する際の前提として有効であるし、その試みは基本的に成功している。その上で、諸概念の80年代当時のコンテクストにおける理解を、具体的な言説に即して検討することで、歴史状況の着実な再現を目指す一方、それらが後の年代とコンテクストにあっては、様々な動機から、また別種の理解を賦与されるといふ、いわば「上書き」の機制についても意識して、後年の議論をも検討の俎上に乗せるというアプローチ、端的には、80年代思想を歴史的に叙述すると同時に、90年代以降に80年代が如何に語られたかを論じようとする「両面作戦」とも呼ぶべきアプローチは、議論に現在のアクチュアリティを持たせているという意味で効果的であり、この二重性を察知した歴史感覚は鋭敏である。

具体的な言説を検討する際は、丁寧かつ的確に論点を整理、紹介し、更に論評を加えるというスタイルでほぼ一貫しているが、1980年代の重要な思潮、影響力のあった文献は、ほぼすべて扱われており、その網羅性は高く評価できるし、資料の扱い方も妥当である。無理な選択や強引な解釈は殆ど見られず、しかも随処に著者の卓越した理解力、洞察力が示されている。

上述のように、本論文が優れた点を多く備えた好著であることは疑いないが、更なる改善を施す余地が皆無ということではない。

目前の現在に直結した近い過去を歴史化することの困難は、同時代性が不断に更新されていくという、対象の流動性に由来するものだが、そのような原則上の問題／アポリアを察知して、「両面作戦」を採ったまではよし、しかし両面をバランスよく検討しているとはいえないようである。資料から抽出され、分析に使われる個別的概念(社会主義社会における疎外論、様々な含みをはらんでいる「文化」、「反近代の近代」など)について、各資料のなかの用法に時に動かされてしまい、論述の中で一貫した自己の敏感な視点を確保できていない場合が見受けられる。それが、分析の明瞭さを部分的に損なう結果となっている。

80年代当時のコンテクストに密着した、個別の言説の検討にあっては、更に深い読みが可能であったろう。他方、歴史化の機制の対象化に際して、しばしば、90年代以降の語りへの批判に重点を置き過ぎる余り、肝心の80年代像が相対的に軽んじられてしまった憾みを遺す。例えば、80年代の「反封建」が多様な意味を含んでいたという重要な指摘が論文中にあるが、「多様な意味を含んでいた」ことの内実や意義を深く追究せず、それを単純化して捉えた90年代以降の語りへの批判へ叙述の中心を大幅に移動させている。その結果、80年代像は深まらず、同時に、90年代以降の語りの評価についても、やや性急な批判ばかりが目立つことになり、より優位の立場から分析と批判を展開するというレベルには達していないように思われる。それは、やはり対象とした議論の論理に密着しすぎた故であろう。

内容については、「80年代」前期の「思想解放」知識人と後期の「文化討論」知識人を「新啓蒙」思潮という点で統一的に把握し分析するのは、立論として成立していると思われるが、両者の性格の違いについては、分析されてはいるものの、いまだ不十分だと感じられる。その違いを十分に分析したうえで統一的に把握するという姿勢をより明瞭に打ち出せば、立論がより立体的になったであろうと思われる。

上記のような不満は残るものの、本論文が企図し、かなりの程度まで実現した歴史化／叙述のスケールの大きさ、作業の先駆性、実験性、何より対象の大きさと複雑性を考えれば、本質的な欠点は少なく、達意の文体で緊張感を保持したテキストの完成度は高いといえよう。本論文は、今後の1980年代中国思想文化研究を新たなステージに押し上げる、学術的な貢献を果たしたものと高く評価される。

最終試験結果要旨

平成26(2014)年6月11日

学位申請者 譚 仁岸 (LD101010)

論文題目 思想空間としての「八〇年代」—「新啓蒙」思潮の諸相と現代中国

論文審査委員 坂井洋史 鈴木将久 尾崎文昭(東京大学名誉教授/東洋文庫)

平成26(2014)年5月30日、学位申請論文提出者 譚仁岸氏の論文および関連分野について、本学学位規則第8条第1項に定めるところの最終試験を実施した。

試験においては、提出論文『思想空間としての「八〇年代」—「新啓蒙」思潮の諸相と現代中国』に関する疑問点および関連分野について質疑を行い、説明と回答を求めたのに対して、譚仁岸氏はいずれも適切な説明を以て応えた。

よって審査員一同は、譚仁岸氏が学位「博士(学術)」を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験の合格を判定した。

以上